

“Attacking Defense” 早稲田

昨シーズン、『原点回帰』というスローガンを掲げて始まった早稲田大学バスケットボール部男子部。チーム全員にとつて未知の領域であった一部リーグでは、格上相手に快勝するなど、自分たちの持てる力を存分に発揮した試合がある一方で、勝ちきれずに惜敗する試合も多く、10チーム中6位という結果に終わる。

そうした反省を生かし、今シーズンは『Attacking Defense』という具体的な目標をチームで共有、倉石総監督の下、仕掛けるディフェンスをモットーとした、昨年とは全くカラーの異なるチームを目指す。長身選手がいらない今年のチームだからこそ、よりチーム一丸となつてまとも、早慶戦・リーグ戦・インカレでの優勝という、昨年成し得なかったさらなる高みへ挑戦する。

Last Year

大学バスケットは、4年生の力によって大きく左右される。その中で、今年度本学の主将を務めるのは大塚勇人(No・6)である。即戦力として期待されながらも下級生の頃はケガに悩まされ、思うようにプレイできなかった大塚だが、昨シーズンでアシスト王を獲得、大学屈指のポイントガードであることを証明した。彼の類まれなるパスセンスや圧倒的なゲームメイクはチームメイトだけでなく、観客をも魅了する。加えて、チャンスと見るや、一人でも点が取れるその得点能力は相手にとって脅威である。また今季は主将として積極的に声を出し、自らも先頭に立つてチームを



6番 4年 大塚 勇人

また、彼の天性のバネを生かした豪快なダンクシュートには是非注目していただきたい。岩谷駿汰郎(No・17)は、小柄ながら速さと強さを兼ね備えたドライブが魅力のガードだ。また彼はムードメーカーとして、チームの下支えをする。どのような状況でも、雰囲気を作る。岩谷は、チームになくてはならない貴重な存在である。最後に紹介するのは、中島英之(No・31)だ。彼はシュート、パス、ドリブル全てにおいて本学でもトップクラスのテクニクを持つ。中でも、味方のシュートチャンスを作り出すアシストや相手を完全に引き抜くドリブルは、観客をも驚かさすことだろう。

下級生の成長

また、下級生も着実に力をつけ、早稲田の戦力として活躍する。河上宗平(No・21)は一年生の頃から試合に出場し、今季はエースとしての働きが期待される。高い身体能力を生かした華麗なダンクシュートや、独特のリズムから繰り出される1on1は誰にも止められない。またその身体能力はディフェンスにおいても遺憾無く発揮され、彼の強烈なブロックショットは今までの早稲田にはなかったものと言える。河上と同様、一年時から主力として早稲田を支え続けてきたのが、玉井勇気(No・8)だ。彼はチーム一のスピードを誇り、それを生かしたドラ

イブからのジャンプシュートは相手を置き去りにする。また今季はディフェンスでの貢献度も高く、彼のスティールからの速攻は早稲田の必勝パターンになりつつある。また昨年の絶対的エース、久保田遼(平成23年度卒)の穴を埋めるのが、チーム最長身の二宮弘憲(No・4)である。193cmと一部のセンターの中では小柄ながらも恵まれた体格と高確率のジャンプシュートを武器に、今年本学の大黒柱として活躍してくれることだろう。次に、本学のシューター・鈴木貴大(No・7)を紹介したい。彼の柔らかいシュートタッチから繰り出される3Pは外れる気がしない。元々、アウトサイドシュートでの得点が少ない早稲田大学にとつて、鈴木は稲田大学にとつて、鈴木はシュート力は大きな戦力となるに違いない。山田舜(No・29)は、冷静な状況判断が強みのフォワード。状況に応じて、インサイド・アウトサイドを使い分ける。ケガのためずっと戦列を離れていたが、今シーズンは復帰を果たし、徐々に試合の感覚を取り戻している。また松本大輝(No・45)の魅力は、安定感抜群のジャンプシュート。日々の鍛錬によって得た体幹によって、どのような体勢でもシュートを決める。

2年生の成長も著しい。今シーズン、新たにスタメンとして活躍する木村晃大(No・15)は、正確なシュートと得点への気持ちが一歩強くなった。190cmながら3Pまで打てるシュートレンジの広さを武器に、貪欲な得点を取りに行く。彼の得点への強い気持ちが早稲田を勝利へ導くことだろう。その木村と高校の同級生である平野哲朗(No・27)は、力強いインサイドプレイが魅力だ。ドライブやリバウンドなど地道にチームを支え続ける。今季よりプレイの幅を広げるために練習している3Pの確率も向上しており、相手にとっては非常に守りにくい選手へと成長した。次に紹介するのは、小林裕太郎(No・32)だ。彼は攻守ともに非常に堅実なプレイをする。オフエンスでは自ら得点を取るだけでなく、味方を生かす動きをする。またディフェンスではインサイドの選手でも守ることのできる上手さを持つ。武津祐太郎(No・



21番 3年 河上 宗平



15番 2年 木村 晃大

12)も昨年、非常に成長した選手の一人だ。大塚・玉井のバックアップとして一年間試合に出場した武津は、プレイに余裕が出てきた。特に、相手のミス誘発させる彼の激しいディフェンスは相手にとって脅威となるだろう。井上康(No・86)は、波に乗った止められないオフエンスが持ち味。ドライブやジャンプシュートだけでなく、カットプレイなどチームプレイの中で力を発揮できる選手だ。中野瑛介(No・19)は、どの状況でも飄々とプレイできる強心臓の持ち主である。ひらりと相手をかまし、ガードとして味方を生かす。北原大輝(No・5)は、勝負強いシュートを武器に、フォワードとして得点を量産する。木村建也(No・35)は、相手の裏を突くのが上手く、与えられた役割をしっかりこなすロールプレイヤーだ。吉岡修平(No・9)は、ガッツあふれるプレイが魅力のガード。ガードの動きだけでなく、積極的にリバウンドにも飛び込む。そんな吉岡と全くタイプの異なるガードであるのが丸海老純也(No・3)である。彼は冷静に状況を見定め、ゲームを作る。中島渉(No・13)は、185cmとインサイドとしては小柄ながらも細かいステップやジャンプ

今季、早稲田大学に新たな風を吹き込む、期待の新人を紹介しよう。まずは、池田慶次郎(No・34)だ。ルーキーながら攻守ともに高い技術を持ち、高確率で決まる3Pや、ディフェンスの間を割るドライブ、前からプレッシャーをかけ続けるディフェンスと非凡なバスケットセンスを感じさせる。次に紹介する山本純平(No・16)は、綺麗なアーチを描くシュートと気迫あふれるリバウンドが持ち味。特にリバウンドは上級生にも当たり前負けせず、豪快に取つてくる。木澤義椰(No・2)は、堅実なプレイが魅力。シュート、パス、ドリブル全ての精度が高く、安定して力を発揮できる。最後に紹介するのが、國枝健太(No・22)だ。彼は今までの早稲田にいないタイプの大型ガードであり、今後の成長が楽しみな選手だ。本年度さらなる高みを目指す上で、彼らの力は必要不可欠であり、ルーキーのフレッシュなプレイに期待したい。

期待のルーキー

大塚主将を中心に紹介した各学年全ての力を結集して、まず早慶戦での優勝を実現する!!